

第168回山口西田讀書会

1. 前々回3月17日(土)は、大殿地域交流センターで、「山口西田讀書会 公開シンポジウム『饗宴』」を開催した。

●第1部は山大生による哲学の卒論発表で、①「人は死ぬのになぜ生きるのか」円福貴也(山大教育学部4年・ビデオ発表)②「吉田松陰の至誠と死生」藤原有希菜(山大人文学部4年)③「『善の研究』における自己の同一性～真の自己と偽我との関係をめぐって」唐露(山大大学院教育学研究科1年)。

●第2部はシンポジウム饗宴「近代的自己のゆくえ」。

提題1「『近代的自己』とは何か」佐野之人 山大教育学部教授

提題2「縄文土器から見えてくる『近代的自己』」杉原信幸・長野県大町市「原始感覚美術祭」主催者(インターネット参加)。

●第3部は岡部邸で饗宴。

●第4部は洞春寺での「金鼓ON管」に参加。

2. 前回 第166回(3月24日)のプロトコル

参加者：佐野、唐露、桑原、岡部、青木、山口、岡田、以上7名(会場：岡部邸)

●前半：前々回第165回(3月10日)のプロトコルと哲学的問い(報告：山口さん)

「純粹経験」「根本経験」「思惟我」など、西田哲学独特の造語が多出し、その度に、私・岡田は迷路にはまり込む。西田先生は、神の姿を見たり、神の声を聞いたり、姿も声も無い神を感じたりする経験のことを「純粹経験」「根本経験」と言っているのではないかという気がするが、そのような活字表現は出て来ない。「純粹経験」、「根本経験」がどのようなものかについて、「西田先生はそれを読者にゆだねている」と佐野先生。また、西田先生は「神は宇宙の根本である」とも、「神はすなわち世界、世界はすなわち神である」とも記述している。この表現は、私の耳には、「神に向かわずとも、世界を極めれば足りる」とも聞こえるし、「神は宇宙そのもの、全知全能以上」とも聞こえ、捉え所がない。

●後半：テキスト輪読。「直接に與へられるもの」の24ページ11行目「時間、空間の形式は…」から27ページ6行目「真の『時』は人格的でなければならぬ」まで。極めて難解。わずか3ページ足らずの中に、カントの「直覚の形式」、ベルグソンの「純粹持続」、ジェームスの「意識縁量」、コンラート・フィドラーの「純粹視覚」といった難解な用語がゴロゴロ出て来る。それぞれの難解用語に本1冊が必要になるのではないかという気がする。

「与えられた現実の経験の内に、超時間的なものを含んで居るのである」という西田先生の記述に対し、山口さんから「アインシュタイン方程式により証明されている。精密計測により、スカイツリー上の時間と、地面上の時間は、進行速度が異なることも実証された」との指摘があり、後日、A4版21ページ分の資料が届いたが、消化不良のままになっている。私は、アインシュタインの発表から100年以上経つ方程式を理解できないままだが、あの方程式を数学的にきちんと理解できる手頃な解説書には、お目にかかれていない。

●哲学的問：「真」の字が付くものは難解なものが多いが、一番最後に出て来た「真の『時』は人格的でなければならぬ」とは、なんぞやをもって、今回の哲学的問とします。